

訳者あとがき

本書はミック・ウエストの著書『Escape from the rabbit hole』2023年改訂版の翻訳である。初版は2018年で、陰謀論に魅入られてしまう人について、どう付き合っ、現実の世界に連れ戻せばよいのかという著者の実践に基づくノウハウを解説している、私の知る限りでは、陰謀論信者を対象とした初めての救出のための手引き書だ。

著者ミック・ウエストはインターネット上のデバンキングの拠点となっているサイト、メタバンの主催者であり、近年再ブームを迎えているUFOとUFOを巡る陰謀論のデバンカーとして広く知られるようになっていく。ミックのとなりは、本書の「私の半生」に詳しいが、ゲーム開発者として一財産築いて仕事を辞め、趣味としてデバンキングをするうちに、陰謀論を信じる人々との対話に意義を見出して、対話活動を続けてきている人物だ。

陰謀論そのものの真偽を検証する行為をデバンキングというのだが、デバンキングから一歩踏み込んで信じ込んでいる人の考えを変えようとする人は少ない。デバンカー、日本で言うところのトンデモハンターには、「一線を越えてしまった人は、いくら正しい情報を伝えようとしても受け入れられなくなって、説得は無駄。彼らは現実世界には帰ってこない」という認識が共有されてしまっているのが大きな理由だ。だが、著者は、ウサギ穴（一線を越えた向こう側の世界への通路）に落ちた人も多くが脱出できていると説く。そして、自力で脱出するよりも、手を差し伸べて救出する方法が存在すると伝えたくて本書を執筆したというのだ。

本書冒頭にまとめられている本書の目的は以下の通りだ。

陰謀論のウサギ穴を理解する。

陰謀論者は普通の人々だと知る。

陰謀論者は何を考え、なぜそう考えているのかに対して明快な理解を深める。

人を尊重する自然な態度を養う。

陰謀論者と同意できる共通の基盤を理解し、彼らの本当の心配を見つけ出す。

陰謀論者の信条の中の間違い、または情報が欠落している分野を見つけ出す。

陰謀論者を新しい情報に触れさせて、もっと事実に基づいた視点を得る手助けをする。

すべてを正直に隠し事も否定もせずに行う。

時間をかける。

2018年の初版ではこの構成に沿って、心理学研究の説く陰謀論者の特徴についての概観、さらにこうしたアカデミックな情報をどう理解し、具体的に利用していくかという解説に続き、ケムトレイル、911、偽旗作戦、平面地球の4つのやや古いがいまだに信者のいる陰謀論を取り上げている。それぞれの陰謀論から脱出した人の体験談も提示されていて、より理解が深まるようになっている。

2023年の改訂版ではさらに各章に2023年時点での追補が加えられ、初版発行後に急速に発展した新しい陰謀論である、選挙不正、Qアノン、コロナウイルス、UFOについての新章が追加されている。

私が本書を手にとったのは、米国大統領選絡みで、日本にも新たな陰謀論が流入し、今まで陰謀論に縁がなかったような人々が陰謀論に魅入られるようになったのがきっかけだった。本書の言うところの「ウサギ穴に落ち込んで陰謀論の不思議の国に行ってしまった人」とは、家族や親しい友人であっても、コミュニケーションは困難になりがちで、現実世界に留まっている方は、相手の変貌に戸惑い、主張の内容が現実離れしていればいるほど呆れてショックを受け、いくら説得しても耳を傾けない態度に、ついには怒りを爆発させてしまう。そうしたときに周囲が「一線を越えた人を説得するのは無理だ」と慰めてしまうのを見るにつけ、何とかできないのだろうかとの思いが募ったからだ。インターネット上で行き会った人や、それほど親しくない知り合いであれば、諦めて付き合いを絶ってしまうのも一つの方策かもしれない。だが家族や友人を失いかけている人にこう告げるのはあまりにも辛い。何とか不思議の国から脱出させる方法はないのだろうかと模索しているときに出会ったのが本書だった。

実は読み始めは、自分の経験や知識が邪魔をして、なかなか先に進めなかった。救出したいと思っている我々も「一線を越えた人は帰ってこない」、「愚かな人が陰謀論にはまる」との頑固な思い込みに捕らわれているのだということ、まざまざと実感することになったのだ。だが「人は時間をかければウサギ穴から脱出できる」と力説する著者に導かれ、陰謀論信者と対話を続ける著者のポッドキャストを聞いたりするうちに、理解が進み、徐々に自分の考えも変わってきた。

「相手が誰であれ、相互理解が可能な人間同士なのだと言う認識を持ち、相手の人間性を尊重する態度を崩さずに、わずかでも共有できる部分を探し、信頼関係を築いてから相手が知らなかった情報を提供する」。本書が提供するノウハウは複雑なものではないが、愛と熱意と忍耐力を要するので、本気で失いたくない家族や友人がいる人か、誰にでも愛を持って接することができる人に限られる面はあるかも知れない。だが、とにかく怒りたくなる気持ちを抑え、著者が実践して有効だったノウハウを活用すれば、ウサギ穴を巡る状況はかなり改善するのではないだろうか。現デバンカーにもウサギ穴にはまった体験を持つ人は多く、抜け出すきっかけは小さな違和感だったとの話もよく聞く。すぐには目立った変化はなくとも、我々のアプローチが変化すれば、陰謀論を信じる人の態度にもやがてなんらかの変化が出てくるだろう。

陰謀論別を選び抜かれた救出に有効な情報、その使い方、話の持って行き方の丁寧な解説も本書の魅力だ。ゲーム・プログラマーでネットに詳しい著者が教えてくれる情報検索法も、必要に迫られてデバンキングの世界の世界に足を踏み入れたばかりの人にはありがたい情報だろう。逆に、陰謀論を信じていて、家族にも信じてほしいと願っている人もこのメソッドを使って、陰謀論を信じない家族への説得を試みてほしい。なぜ家族が信じてくれないかが理解できるはずだ。そして、自分が信じていることには、人を説得するだけの根拠があるだろうかと考え、自分は間違っていないと確信を強めるための情報収集に加えて、批判（デバンキング）も読み、それは間違っていると冷静に指摘できれば、家族も耳を傾けてくれるかもしれない。陰謀論を信じ続けるにしても、新たな情報を知り、自分の信念が変化することで家族との会話が復活するかもしれない。

著者が指摘する「陰謀論の対称性」という概念も重要だ。相手はバカだと思っていると、実は相手もそう思っているから、関係性が壊れてしまうのだ。双方とも特別な人間ではない。誰でもうっかりウサギ穴に落ちる。穴の中で現実と切り離され、進んでいった先で、面白い不思議の国の住人たちと出合ったアリスの体験そのものだ。彼らの不思議な考え方に巻き込まれれば、現実世界の居場所を失っていく。だが、陰謀論の国は、住人たちの機嫌を損ねれば、たちまち追放されてしまう場所でもある。現実世界に帰る場所が確保されていれば、アリスの不思議の国の「赤の女王」のような理不尽な支配者の機嫌を損ねないために、陰謀論を信じ続けなくてもよくなり、脱出がより容易になる。間違っても現実世界の住人が、彼らを追い詰めて穴に逃げ込むように仕向けてはならないというのが、私の今の気持ちだ。

本書のノウハウは、最近話題になったような「エビデンスで殴ってくる」と感じさせない情報提供にも使える。福島原発事故後に、さんざん言われた「欠落モデルの欠点」と「権力勾配により啓蒙が失敗する」問題も、この「相手も自分と同じ普通の人間なのだ」という認識を辞して、礼儀正しく、尊敬を持って接すること」の欠落が原因だったのではないか。これができるようになれば、事実を伝えたいデバンカーに対する「傲慢で弱い者いじめをする」といったイメージが和らぐだろう。事実を広めるためには、それも大きなサポートになるはずだ。

こうしたノウハウだけでなく、各陰謀論についてもこの分野をよく知っているはずの私にとってもなるほどと思わせる情報が多く、陰謀論への入門書としてもお勧めできる。

初心者からベテランまで、好奇心を満たしたい人にも、知識と体験に自信がある人にもぜひ読んで欲しい一冊である。